

特集

小学校工作・技術教育に関する
諸外国の現状及び日本の歴史

スウェーデンの工作教育

名古屋大学 横山悦生

1. はじめに

スウェーデンにはスロイドと呼ばれる教科があり、1880年代から1900年代にかけて世界の手工教育に大きな影響を与えたことで知られている。なかでも、オットー・サロモンがネース・スロイド学校での実践を通して検証し、ネースのスロイド教員養成講習会への参加者やスウェーデンのスロイド担当視学官などとの議論を媒介として作りあげていったモデル・シリーズという一連の木工のモデルは、スウェーデン国内では1950年代まで使われたという点でかなり長期間生き続けたものであった。現在のスウェーデンでのスロイド教員養成コースでは、学生たちはスロイド教科の歴史の一コマとして、サロモンの教育思想や実践を学んでいる（筆者は、1997年度にリンショーピン大学にて、2003年度はストックホルム教育大学にてそれを実際に見学する機会を得た）。スロイド教科の性格も1930年代や1960年代以降に大きく変わっていったが、そのようなスロイド教科の歴史については別稿にゆずり⁽¹⁾、次項においてスウェーデンの工作教育の現状について紹介する。

2. スロイドの時間数と実際の授業の様子

現在のスロイドの授業は、木工・金工スロイドとテキスタイル・スロイドの大きく

2つに分かれて行われている。授業では、第3学年から第7学年までは、通常のクラスを半分に分け、木や金属などの固い材料を扱う木工・金工スロイドと布などの柔らかい材料を扱うテキスタイル・スロイドの2種類のもので前期と後期にそれぞれの半学級が入れ替わって学習している。そのようなシステムによって、スロイド担当教師（現在ではテキスタイル・スロイドと木工・金工スロイドのそれぞれの専科教員が担当）は15名以下で授業を実施している。さらに第8学年と第9学年では、木工・金工スロイド、テキスタイル・スロイドのどちらかを生徒が選択して学習している（教科内選択）。つまり第3学年から第9学年までスロイドは必修教科として位置づけられている。授業時間は学校によって異なるが、多くは週に1回で80分か110分である（日本の学校でいう2時間連続の授業に相当する）。スロイドの授業の様子や設備の一部を撮影した写真（No.1～6）を掲げておく⁽²⁾。

これらの写真にも示されているが、スウェーデンの工作教室には豊富な道具類や材料が置かれていた。筆者はストックホルム郊外の学校で7年生（日本の中学1年生にあたる）の授業を長期にわたり見学したが、12月には（木工・金工スロイドの）自由製作課題となり、生徒は豊富にある材料を自



写真1 木工スロイドの授業の様子



写真4 木工室の道具類



写真2 木工スロイドの授業の様子

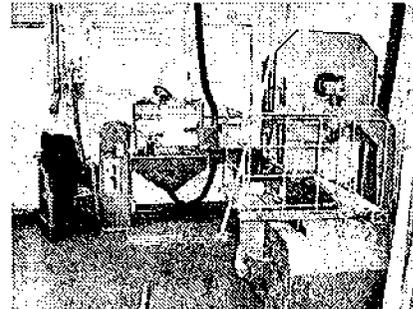


写真5 木工室の機械（木工旋盤等）

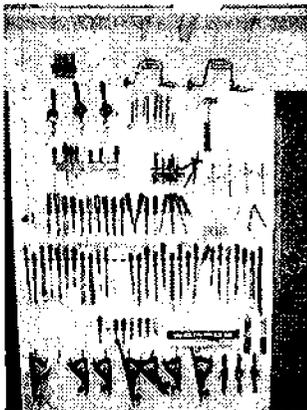


写真3 木工室の道具類



写真6 テキスタイル・スロイドの授業の様子

由に使用していたことが印象深かった。

3. 現在のスロイド教科の目的と性格

スロイド教科の目的は、現在のスウェーデンの「指導計画と評価基準 (kursplaner och betygskriterier)」(日本の学習指導要領に相当する) では、次のように規定されている⁽¹⁾。

「教科スロイドは生徒の創造的 (ska-

pande) 能力、手工的 (manuella) 能力、コミュニケーション的能力の錬磨を通じて生徒の全面発達に寄与する。スロイド教科は手作業 (manuellt arbete) と知的作業を統一的に包含しており、創造性、好奇心、責任感、自立性、問題解決能力を発達させる。それは、アイデアに始まり、完成したモノにいたるプロセス (スロイドプロセス) に表現される。テキスタイル、木工・金工スロイドは、生徒が彼ら自身の能力への信頼を強化し、日常生活での問題に対処するた

写真7 写真フレーム
（8年生・女子）

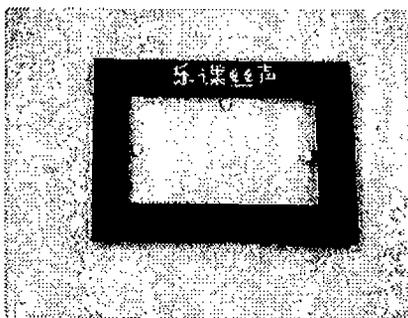


写真8 指輪
（8年生・男子）



写真9 花瓶
（8年生・男子）

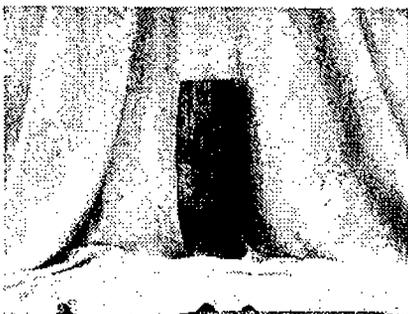


写真10 チェスの盤
（8年生・男子）

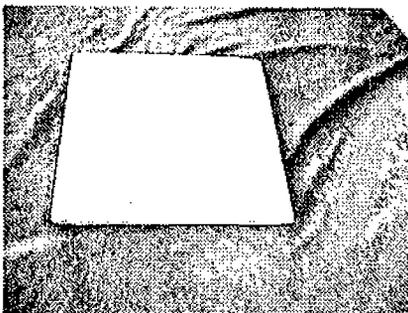
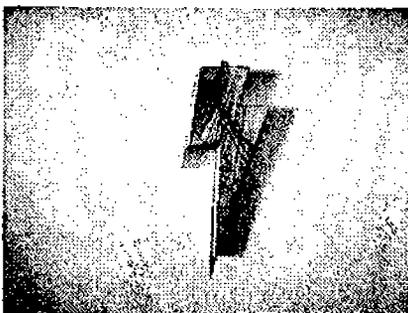


写真11 時計
（7年生・女子）



めの準備を与える知識を発達させる。／デザインと機能を評価し、判断することは、日常生活において頻繁に必要とされる。スロイドの教育は美的 (estetica) 価値についての意識を創り出すこと、材料の選択や加工、設計が製作物の機能と耐久性に及ぼす影響についての理解を発達させることを目的としている。スロイドの教育のなかで、環境問題や安全問題に関する知識を与えたり、資源を節約することの重要性に関する意識を涵養することも目的としている。スロイド教科は、新しい思考や新しい創造のための基礎をすえることになろう。この教

写真12 彫刻
（7年生・男子）

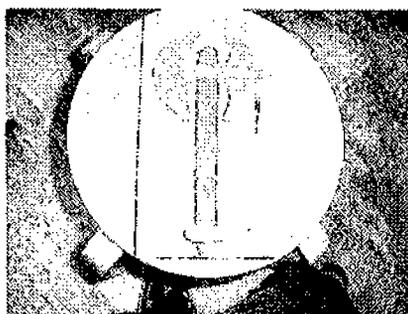


写真13 棚
（9年生・男子）

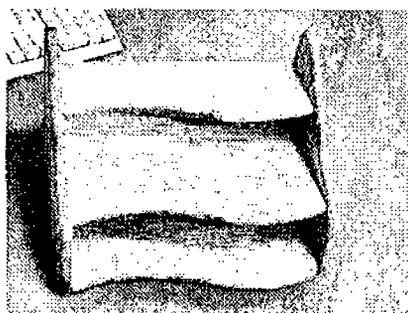
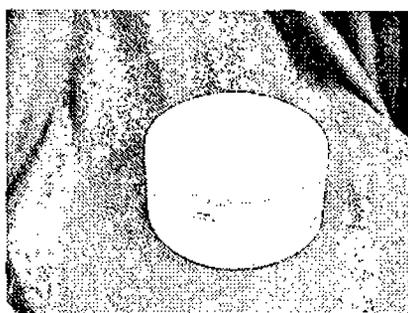


写真14 椀
（7年生・男子）



育は、過去と現在のスロイドの伝統に関する知識を通して、生活史や平等問題への見識を与えることになる。スロイド教科は、より広い視点から多様な文化の手工(hantverk)の伝統に関する意識を創造することも目的としている。」

ここで、「アイデアに始まり、完成したモノにいたるプロセス」を学ばせるとしている点は、今日の「ものづくり」学習の基本であり、近年のテクノロジー・エデュケーションの国際的動向(“Technology education for all”)で追求されている点でもあ

る。また、「環境問題や安全問題に関する知識を与えたり、資源を節約することの重要

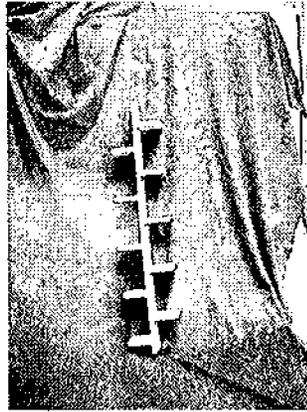


写真17 調味料置き
(7年生・女子)

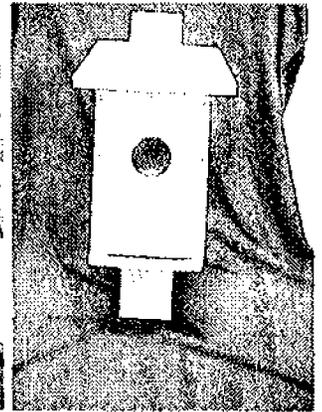


写真18 鳥小屋
(6年生・男子)

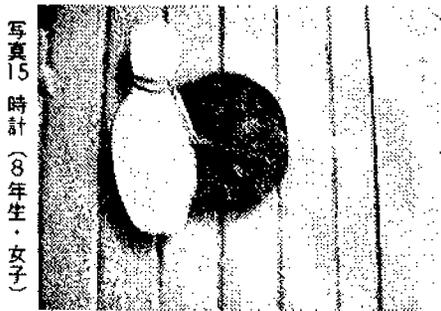


写真15 時計
(8年生・女子)

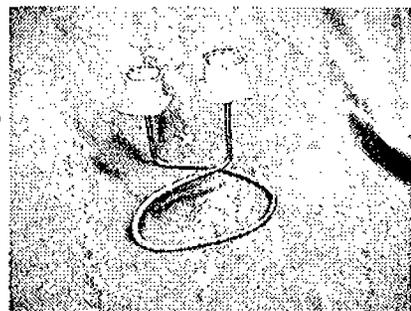


写真16
キャンドル
(8年生・男子)

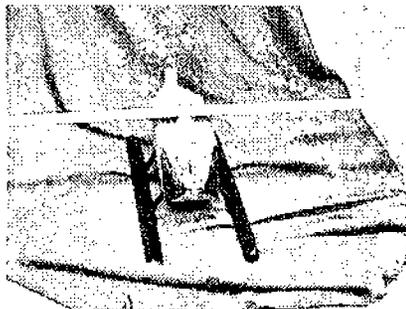


写真19 ヘリコプター (8年生・男子)

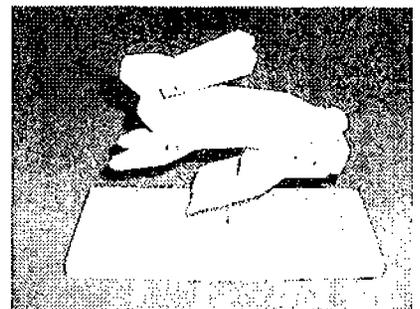


写真20 うさぎ (6年生)

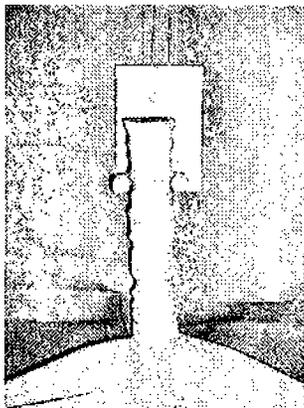


写真21 キャンドル
(9年生・男子)

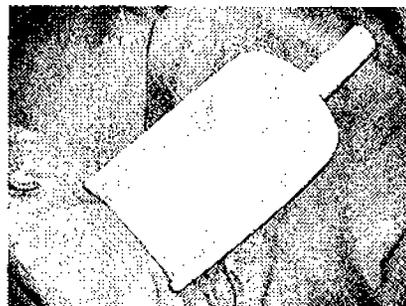


写真22 ひしゃく (8年生・男子)

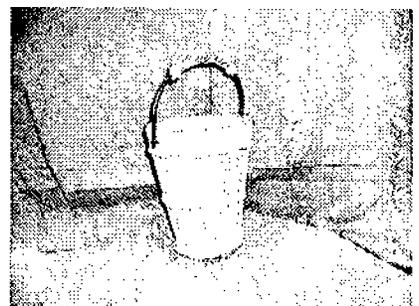


写真23 木製バケツ (9年生・男子)

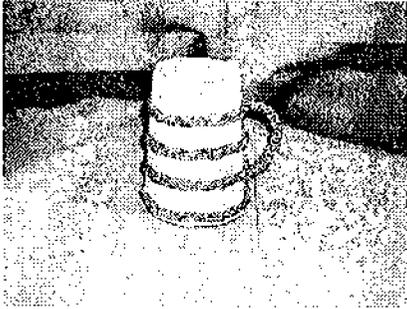
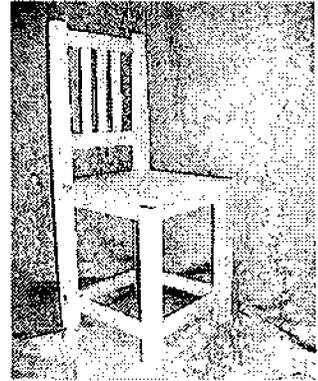
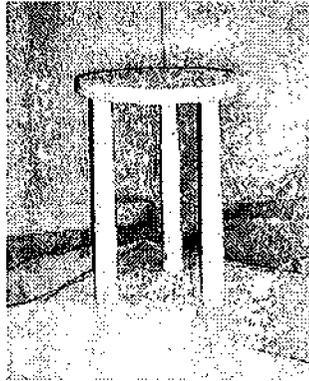


写真24 木製コップ (9年生)

写真25 木製腰掛け (7年生・男子)

写真26 木製椅子 (9年生・女子)



性に関する意識を涵養する」としている点も同様である。スウェーデンでは、この教科の目的や性格を「1960年代以降のスロイド教科は創造的活動におらいをおき、その目的は生徒が作業する材料を使って個性的な表現を見いだすように刺激する」ことにあり、「芸術教科 (estetiska amnen) の一つである」とする見解が支配的であるが⁽⁴⁾、ものづくりを基本的性格としている点で、技術教育としての工作教育の側面をもっていると考えられる。

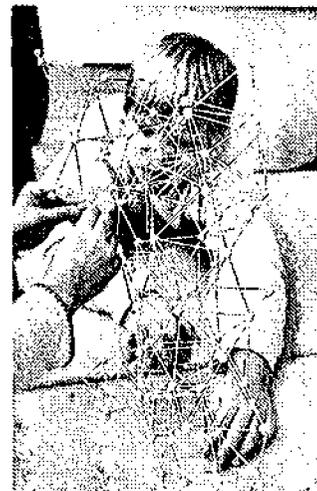
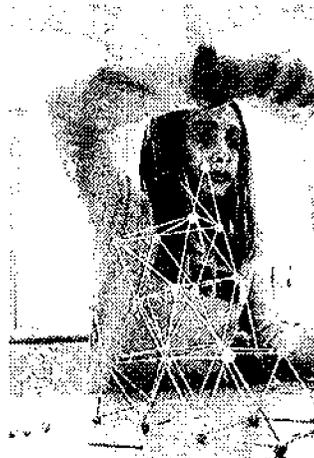
4. スロイドでの生徒の作品

次に、スロイドで製作された作品 (生徒の性別と学年) の写真 (No.7~26) を掲げる^{(5) (6)}。



構造の基本の学習
(生徒の年齢は10歳くらい)

左から写真27・写真28・写真29



5. テクニク (Teknik)

スウェーデンには、1980年代より新たな必修教科として、テクニク (日本語に翻訳すると技術) という教科が登場し⁽⁷⁾、この教科でも工作教育 (ものづくり) が行われている。この教科は必修教科ではあるが、5学年までと9学年までの到達目標だけが設定されており、どのように実施するかは各学校にまかされている。また、その担当する教師も理科の免許をもった教師やスロイドの免許をもった教師が現職研修をうけて担当するケースが多く、テクニクでとりあげる教材も多様である。写真27と写真28に掲げたものは、第3学年の生徒が取り組んでいる課題である。写真29も写真27と

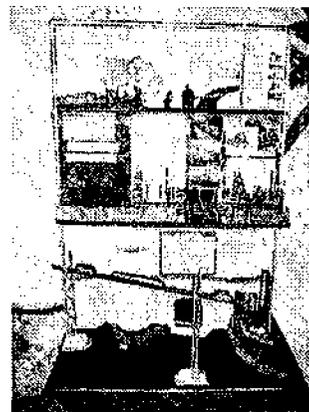
同様で、生徒は自由に組み合わせをつくる。

最後に、教員養成大学のテクニクの授業でグループ製作の課題も写真30、写真31に示しておきたい。



テクニクでの共同製作
(歴史の学習と関連させたもの)

左から写真30・写真31



6. おわりに

以上にスロイドとテクニクで取り組まれている作品を中心に紹介してきた。スウェーデンでは、スロイドという教科において充実した施設・設備のもとで豊かな工作体験が保障されているうえに、テクニクという教科でも工作的な内容が含まれている。筆者がスウェーデンに長期にわたって滞在し、スウェーデン人の生活ぶりを見て考えさせられたことは、土日の休日や長い休暇（あるいは仕事が終わってからの夕方）の時間）を使って自分の家やサマーハウスをつくったり、修理したりしていることである。家には工作道具がそろえてあり、なかには工作機械までおいてあるところもあった。あるサマーハウスには金工室と木工室を分けているところもあった。子どもたちは、こうした活動に父親と一緒に加わり、手伝いながら道具や機械を使う技能を学んでいくように思われた。また、自然が豊富にあるところでは、子どもたちの遊びのなかで小屋づくりなどをしてきた。このような「ものづくり」の豊かな経験が学校の工作教育とは別にスウェーデン人の生活の一部になっていることも付け加えておきたい。

注.

- (1) 拙稿『『教育的スロイド』の成立をめぐる』技術教育研究会『技術と教育』第362号, p.11～p.13, 2004年2月。同『スウェーデンのスロイド教科の現状とその歴史(その1)』『技術教室』p.58～p.65, 2004年6月。同『スウェーデンのスロイド教科の現状とその歴史(その2)——オットー・サロモンとネース少年スロイド学校』『技術教室』p.58～p.63, 2004年7月。
- (2) これらの写真は筆者が2004年2月に訪問したウメオ市郊外の学校で撮影したものである。
- (3) Skolverket “Grundskolan - Kursplaner Betygskriterier—”, s.91, 2000
- (4) Sven Hartman “Lärares kunskap” s.104～s.105, 1995
- (5) 写真7～19は、ストックホルムの学校において2004年6月までスロイド担当教師であった、クリストファー・ピンズ氏から提供されたものである。
- (6) 写真20～26は、ヘンリック・オロフソン氏から提供されたものである。
- (7) この経過については、拙稿「スロイドの伝統と技術科の誕生——普通教育における技術教育を考える——」『日本の科学者』, Vol.40, No.1, January, 2005 を参照されたい。